

アグリ筑西

2023年11月号

昼夜の寒暖差が激しい季節となりました。
体調管理にお気をつけください。

県西農林事務所 経営・普及部門
(筑西地域農業改良普及センター)
筑西地域農業改良推進協議会 発行
Tel : 0296(24)9206
Fax : 0296(24)6979



筑西地域農業改良普及センターHPへアクセス！↑

イチゴの今後の管理について ～「とちおとめ」の定植後の管理～

いよいよイチゴが開花し収穫が始まるシーズンとなります。
今後の管理のポイントを確認しましょう。

○保温開始時期

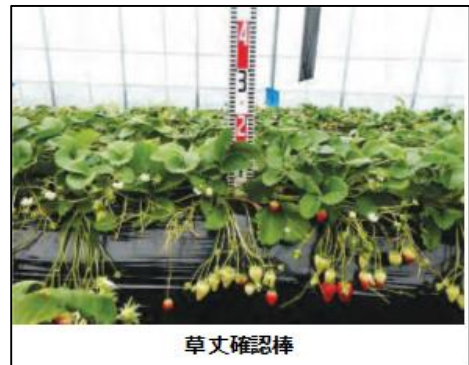
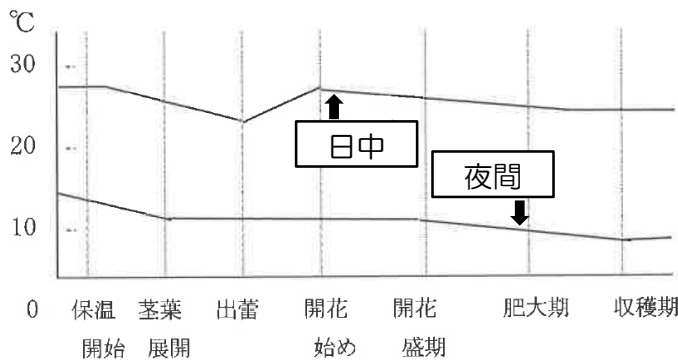
高温管理によって花芽分化が遅延する恐れがあるので定植後30日後を目安に保温を開始しましょう。

○マルチの展張

定植後25～30日を目安に、出蕾時に展張しましょう。根張りが十分でない場合は、急激な地温の上昇は避け、展張を遅らせるかマルチの裾をたくし上げておきましょう。

○温度管理

根及び花房の充実を図るために、出蕾期までは高温管理にならないようにしましょう。出蕾期以降は、日中の換気温度を25℃～27℃を目標とし、夜温は8℃を下回らないように草勢をみながら加減しましょう。収穫開始期の草丈は24～25cmが適当です。草丈確認棒を設置し、これを目安として管理を行いましょ。生育経過ごとの温度管理の目安は以下を参考にしてください。



生育経過	昼温	夜温	備考
生育促進期	30℃前後	自然温度～12℃	※夜温に注意
出蕾期	26～27℃	10℃	
開花期	25℃前後	8℃	※日中の低温に注意
果実肥獲大期・収期			

○肥培管理

追肥は頂花房の果実肥大期以降、草勢に応じて施用しましょう。また、厳寒期の草勢維持のために必要に応じて電照の点灯や炭酸ガスの施用を行いましょ。

○病害虫防除

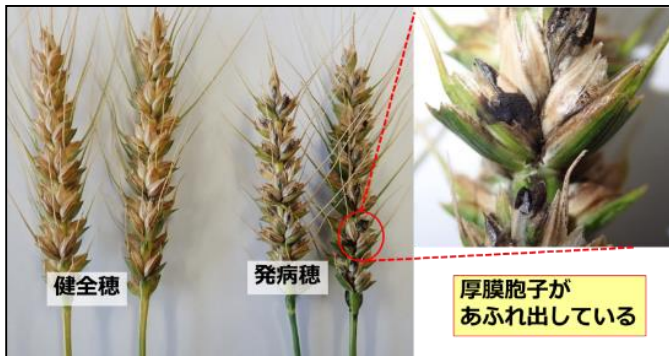
うどんこ病、灰色かび病、ハダニ類、アザミウマ類、ヨトウムシ類、アブラムシ類等、ミツバチに影響の少ない薬剤を選択して防除を行いましょ。

コムギなまぐさ黒穂病とその対策

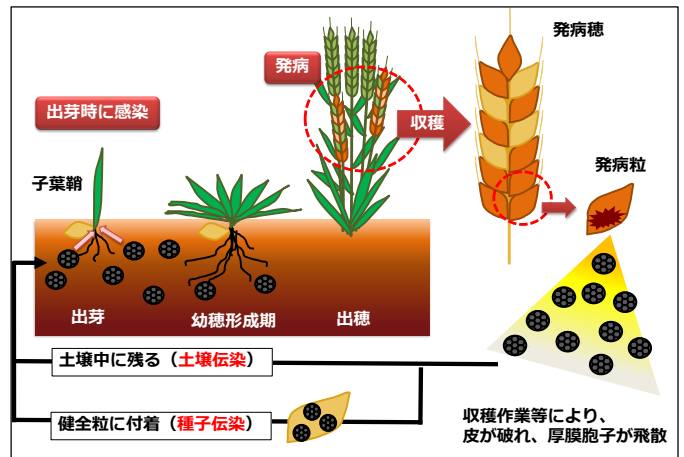
コムギなまぐさ黒穂病はコムギが罹る糸状菌（かび）による病害です。罹患すると健全な粒にも孢子が飛散付着し、黒変するだけでなく異臭麦となるため、農産物検査の受検ができなくなります。発生のみられた圃場では、以下の対策を実施しましょう。

防除対策（①から順に効果が高い対策です）

- ①田畑転換する ②小麦以外の他作物（野菜、大麦等）を作付する ③種子更新及び種子消毒する ④適期播種、適正播種深度、排水対策に努める



- ＜コムギなまぐさ黒穂病の特徴＞
- 穂が黒穂症状で「なまぐさい臭い」がある。
 - 草丈が短くなる。
 - 発病穂は成熟期でもやや暗緑色。
 - 実の中には黒色の孢子が充満。



＜伝染経路＞

- 種子伝染(種子に孢子が付着)
- 土壤伝染(土壤中で3～8年生存)

再生農地でかんしょの収量・品質アップ！

茨城県では、「かんしょトッパーランナー産地拡大事業」により、荒廃農地の再生等による、かんしょ生産農地の確保の取組みを支援しています。今回は、当事業を活用して遊休農地を再生した畑において、収量・品質の向上に取り組まれた事例をご紹介します。

この再生農地は、排水性が悪く、養分がほとんど入っていなかったことから、本年度プラソイラで耕盤破碎するとともに豚ふんペレット堆肥を入れて作付けしました。その結果、収量は3t/10a程度となり、昨年度の単収2t/10a程度よりも増加しました。B品率（曲がり等）も減少し、品質面での改善もみられました。

